

## 渭浜庵執筆一茶

黄色 瑞華

一

一茶が家庭不和の解消と経済的事情とによって、江戸へ奉公に出たのは、安永六年（一七七七）の春、十五歳の時である。『七番日記』の巻頭に、「安永六年、出<sub>ニ</sub>旧里<sub>ニ</sub>而漂泊卅六年也。日数一万五千九百六十日、千辛万苦、一日無<sub>ニ</sub>心楽<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>已<sub>レ</sub>而終成<sub>ニ</sub>白頭翁<sub>ニ</sub>」（文化九年の項）とあり、その述懐のごとく「千辛万苦」の生活が彼を待ちうけていた。

『父の終焉日記』には、

十四歳<sup>(五)</sup>の春の暁、しほ<sup>(を)</sup>く家を出し時、父は牟礼迄おくり給ひ、「毒なる物へたうべなよ、人にあしざまにおもはれなよ。とみに帰りて、すこやかなる貞<sup>かほ</sup>をふた<sub>レ</sub>び我に見せよや」とて、いとねもごろなることの葉に、おもはず<sup>なみた</sup>泪<sup>なみた</sup>うがミしが、未練の心ばしおこりなべ、連なる人に笑れん、父によ<sup>(わ)</sup>へき歩<sup>わ</sup>ミを見せじと、むりにいさミて別け

り。(五月二十二日)

とある。又、

卯の下刻、牟礼てふ駅にいたるに、こハそのかミ一茶江戸へおもぶける日、父の翁見送り給ひし里なりけるが、今ハ廿四年の昔なりき。河の音、坂の形も、ほのかに心おほえありて、何となくうれしく、(五月十日)

ともある。父に見送られて、郷関を出でし日の切ない思い出は、その生涯、特に江戸における生活の中で、反芻されていたものと思われる。

江戸に出た一茶は「連なる人」の案内でどこかに草鞋をぬいだはずではあるが、どこにどう落ついたかは全く不明である。『文政句帳』に、

住馴し伏家を掃き出されしは、十四(五)の年にこそありしが、巢なし鳥のかなしみはたぶちねぐらに迷ひ、その軒下に露をしのぎ、かしこの家陰に霜をふせぎ(中略)くるしき月日おくるうちに、ふと諧々たる夷ひなぶりの俳諧を囀りおほゆ。(文政六年正月の条)

とある。

この時代、農村の窮乏ははなはだしく、各地にあいついで暴動が起っていた。一茶が江戸へ出た安永六年正月十二日にも、高井・水内両郡内に百姓一揆があった。又、都市への出稼ぎが急増、その禁令(安永六)も出ている。

都市における地方からの流出民のほとんどは、商売の元手もなく、確かな手職もないという人たちであったから、

武家・町家に住み込んで雑役をするか、日傭や軽子などに従事するほかなかった。一茶もまたその一人であり、「椋鳥」「信濃者」などと嘲笑されながら、「荒奉公」に耐えなければならなかったのは当然であったと思われる。

## 二

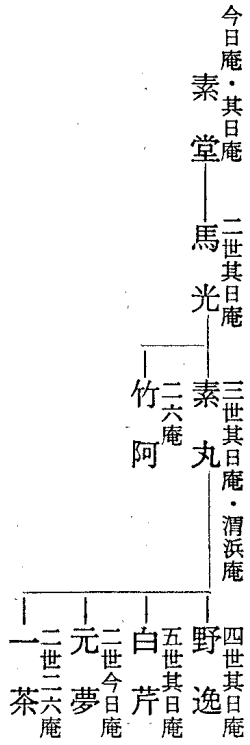
一茶が具体的にどのような仕事に従事したかは不明であるが、やがて、その「荒奉公」の中で、「諧々たる夷ぶりの俳諧を囀りおぼ」えることになった。

馬場錦紅編『葛飾蕉門分脈系図』（嘉永末年成）の卷三、「三祖素丸門人下」の項に次のようにある。

一茶 二六庵 小林菊明

信州善光寺に住し、寛政二年戊四月七日入門。後、判者にすゝみ、竹阿の号を称し、文化年中一派の規矩を過つによって、白芹翁永く風交絶す。奥羽紀行あり。

葛飾蕉門（葛飾派）は、山口素堂を祖とする蕉風一派であり、素堂の別号其日庵を嗣号する者が代々この派の中心となった。すなわち、其日庵二世は長谷川馬光、三世・溝口素丸、四世・加藤野逸、五世・関根白芹と継承され、『葛飾蕉門分脈系図』の編者、馬場錦紅はその九世である。又、一茶の項に記された「二六庵」は竹阿の庵号であり、竹阿は馬光の門である。今、この系図によって、一派の俳系を略記すれば次のようになる。

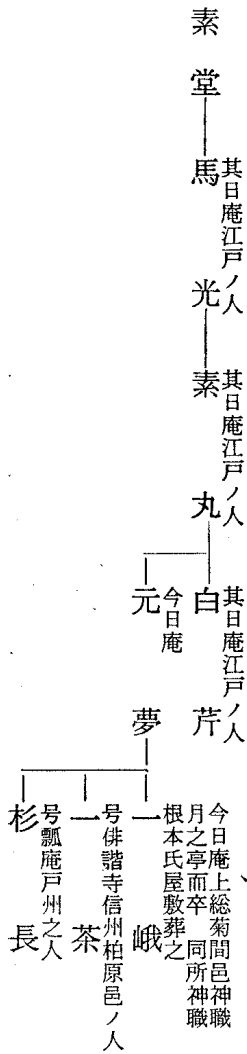


二世其日庵の素丸号、五世其日庵の白芹はともに馬光の別号を嗣号したものである。又、元夢の今日庵は、もと、千利久の孫・宗旦の号であり、茶事をよくした素堂が嗣号していたものである。『葛飾蕉門分脈系図』の元夢の項に次のようにある。

今日庵は素堂隠士茶室の号にて、宗旦三世を称せらる。素丸翁の時、俳諧にもあるべしとて、栢翁(注・元夢の別号)を俳諧者流の今日庵二世と号すべきよしゆるされたり。

とある。『葛飾蕉門分脈系図』によれば、今日庵は元夢の後、木造万舞(三世)、木造秦岐(四世)、長田錦暁(五世)と継承されたことになっている。

露柱庵政二説・思無邪園亀卜編『俳道系譜』(安政二年八月成)によれば、一茶は元夢門と記るされている。素堂以下の俳系を略記すれば次のようになる。<sup>注1</sup>



この系図によれば、今日庵は一峨が嗣号したことになる。又、寛政元年刊の玄阿撰『注2柳の友』に、

振り替る柳の色や雨あがり

今日庵執筆  
菊 明

と見え、寛政元年『柳の友』上梓の時、一茶は元夢門にあって、執筆を勤めていたことが知られる。もちろん、一峨は同門の先輩である。

さて、『葛飾蕉門分脈系図』の一茶の項には、「文化年中一派の規矩を過つによって、白芹翁永く風交を絶す」とある。その成立が嘉永末と推定されるから、五十年前の「規矩を過つ」の記事は伝聞によるのであろうが、あるいは、一峨選の『なにぶくろ』（文化九年刊）に序文を寄せるなど、積極的にこれを後援したことをさすものかと思われる。

『なにぶくろ』の一茶の序に、

橘町といふ所は芭蕉翁の袖の香なつかしとて、元夢法師そこに今日庵といふをいとなみて、うき世の月の見果どころとなんたのまれける。しかるに法師なくなりてよりことし十三年、その庵しれる人さへもしたしきかぎりは、白露のほろ／＼ときえ、嵐のばっばと吹ちり、庭もまがきも秋の野らとなりて、いまはそれとさすべき青草だにもなく、いたづらに犬の臥しど処とはなれりけり。さるを涙もろき一峨老人しきりにむかし恋しがりつゝ、ふるくありける元夢仏の木像を安置せむと、則、法師のゆめの跡にふたゝび今日庵むすぶべきこゝろざしを起しぬ。おのれかの世のあらしに吹のこされ、此時にあへるよろこびに、やがて再建(三)のからがしらとなりて、とも／＼乙鳥つばくろの土をはこび、木つゝきの穴ほりて一簣(實)のちからをあはすものなり。

とある。すなわち、元夢の十三回忌にあたり、門人の一峨が江戸橋町に今日庵を再興し、その記念集が、『なにぶくろ』である。一茶はその序の中で、「再興の講頭となりて」と述べているように、強力に後援したものと思われる。

『葛飾蕉門分脈系図』には、

其後少時嗣号の事なかりしが、文化の頃今日庵一峨と称するものあり。白芹翁より尋られしに自称也。一峨はいく、今かつしか今日庵と称するゆへ、世に用ひられて、頗る世業の助となれり。かまへて正風の文台にあらざれば、知らざる分にして玉はらば幸ひ甚しからむ。もし葛門下に今日庵を号する人あらんには、速に罷玉べしと乞ふにより、彼も葛門をしたへばこそ、しかなれとて、其望みにまかせおかれし、

とある。曲折の後、一峨の今日庵嗣号は一応認められるようになったのであるが、『葛飾蕉門分脈系図』には、「一峨死して後、今日庵元夢といふもの自称し正風の会席に出来る」。「其後も寛山又今日庵を号す」「斯く無頼のともがら俳祖の一号を汚すの憚りあればとて、万舞に今日庵の号をあげられ、三世を称せしむ」とあって、正式な今日庵の嗣号は、素堂—元夢—万舞となった。

世業のために今日庵を自称したとする『葛飾蕉門分脈系図』が一峨に荷担した一茶を一門の「規矩を過つ」とするのも、又当然のことと考えられるが、元夢門にあって執事役を勤めた彼にとっては何とも分の悪いことではあった。

### 三

天明七年、一茶は竹阿の二六庵にあって、連俳の秘書『白砂人集』はくさじんを書写し、その奥書に、「天明七申霜月吉日・

二六庵於<sub>ニ</sub>机下<sub>ニ</sub>写<sub>レ</sub>之 小林圮橋」と署名している。書体が後年のものと異り、「天明七申」（正しくは「天明七未」と干支を誤っていることから偽書説の提出もあるが、今日一茶の筆と断定されている『仮名口決』の巻頭に、「此書從<sub>ニ</sub>素堂隱士<sub>ニ</sub>伝<sub>ニ</sub>北窓翁<sub>一</sub>。翁堂三世也。予亦從<sub>レ</sub>翁学<sub>ニ</sub>誹諧<sub>一</sub>」とあり、竹阿に師事した事実が認められる。ただし、天明七年は竹阿の大阪移住後であるから、それは主人の留守中ということになる。

一茶と竹阿の関係については不明なところが多く、軽々には論じ難いのだが、その中で二六庵の嗣号に関しては異論がない。その時期については、前田利治氏紹介の「二六庵切」（俳句とエッセイ）昭49・2の巻頭に写真）によって、寛政四年三月西国行脚出立以前と推定される。すなわち、一茶は寛政四年秋、伊予の入野に山中時風を訪ねたが、時風は不在であった。その折の書付である。「入野に風君を訪ふ。あはず／霧晴てあるのに雲のあるじ哉／右東武二六庵・一茶」とある。

竹阿が大阪で没したのは、寛政二年三月十三日であるから、一茶の二六庵嗣号はそれ以降、寛政四年秋の間ということになるが、この行脚出立前、あるいは『寛政三年紀行』（三月二十六日出立）の前であったかも知れない。ただし、これ以外に一茶は西国行脚中に、「二六庵」を使用していない。その庵号を常用するのは、寛政十二年、庸和歳旦帳『庚申元除楽』（よい程の道のしめりや朝霞<sub>二六庵</sub>一茶）以降である。

#### 四

前述のごとく『葛飾蕉門分派系図』によれば、一茶は三世其日庵溝口素丸の門であり、その入門は寛政二年戊四月七日である。その前年刊の『柳の友』には「今日庵執筆菊明」として一句の入集があった。しかるに、「東武渭浜庵・七十八翁・素丸、天明七丁未年<sup>注4</sup>」の序文を有する『真左古』（信州佐久郡上海瀬村、新海米翁の米寿記念俳諧集）に、

是からも未だ幾かへりまつの花

渭濱渭執筆  
一茶

が見える。「渭濱庵」は、素丸が安永二年に其日庵を加藤野逸に譲り、浜町に移ってからの庵号である。この句、素丸の「この上に幾春積ん米車」（一茶の二句後に<sup>出</sup>）に唱和したものだ<sup>が</sup>、句、一茶の俳号ともにこれをもって、初見とする。

そうすると、『葛飾蕉門分脈系図』の「寛政二年戊辰四月七日入門」をどう解釈すればよいのか。すでに、前田利治氏は「小者も兼ねた素丸個人の書記役であったか<sup>注5</sup>」と推察されている。

『葛飾蕉門分脈系図』の元夢の項の、今日庵を自称した寛山のところに、

寛山は時々庵樗山の方に執筆役いたせる奉公人にて、

とあり、一茶もまた「執筆役いたせる奉公人」だったのである。そして、「寛政二年四月」相應の扇代を贈って正式に入門したのであろう（文化七年十二月九日、一茶も佐藤魚淵から六十八文の扇代を受けている）。

## 五

天明七年（一茶25歳）

十一月

竹阿の二六庵に留守居して、『白砂人集』を書写。小林圀橋と署名。



同年(刊)

素丸序『真左古』に、「渭浜庵執筆一茶」一句入集。

天明八年

四月(刊)

安袋(元夢の前号)撰『俳諧五十三駅』に「東都菊明」十二句入集。

八月(序)

風後撰『百名月』に「菊明」一句入集。

寛政元年(一茶27歳)

一月(序)

玄阿撰『はい柳の友』に「今日庵執筆菊明」一句入集。

三月(序)

風後撰『花勸進』に「菊明」一句入集。

元夢撰『俳諧千題集』に「江戸一茶」三句入集。

寛政二年

四月七日

素丸に正式入門

素丸撰『夏孟子論』(4序)、馬光五回忌『霞の碑』(5序)、素丸撰『秋顔子』(9序)などに入集。

寛政三年

一月

我泉（素丸門）の『歳旦帳』に「渭浜庵執筆一茶」入集。

寛政四年

秋

「二六庵句切」に「東武二六庵、一茶」と署名。

資料は右の通りである。ただし、『白砂人集』の書写と『真左古』の刊行の前後関係は不明である。「渭浜庵執筆」は「一茶」、「今日庵執筆」は「菊明」であり、一茶号は今日庵（元夢）系俳書では『俳諧千題集』を初見とする。

素丸に拾われた一茶は「執筆役いたせる奉公人」で、その間に竹阿の二六庵の留守居役も兼ね、同門の元夢の指導も受け、時に執筆役も勤めた。はじめ、素丸のもとでは「一茶」、元夢のもとでは「菊明」と号し、正式に素丸門となるころから「一茶」を多用、西国行脚出立前には、二六庵の嗣号を認められた。今のところ、これ以上の推察はむずかしい。

〈注〉

- 1 勝峯晋風「一茶研究」（新潮社『日本文学講座19』）
- 2 前田利治「寛政期一茶の書俳諸入集の句をめぐって」（『近世文学論叢』）
- 3 尾沢喜雄「小林一茶」（『国文学』昭39・1）
- 4 石井光太郎「一茶二題」（『連歌俳諧研究』昭46・3）
- 5 前田利治「一茶調成立まで」（『俳句とエッセイ』昭49・2）